

北九州市立大学におけるグローバル人材育成事業の 現状と課題

—平成 26 年度入学生のプログラム参加状況および TOEIC スコアの分析—

西出 崇*・永末 康介

1. はじめに

北九州市立大学では、これまでもいわゆる「グローバル人材」の育成に力を入れてきたが、文部科学省の「グローバル人材育成事業」をうけてこれまでの教育内容をさらに発展させ、平成 24 年度から「Kitakyushu Global Pioneers (以下、KGP)」として体系的なグローバル人材育成のためのプログラムを展開している。本稿の目的は、この KGP プログラムのうち、導入部にあたる 1 年生を対象とした「Start Up Program (以下、SUP)」の成果と課題について、TOEIC スコア等のデータに基づいて定量的に検討することである。KGP の目的や概要、および平成 25 年度の SUP の成果については、既に西出・永末 (2015) にまとめている。ここではこれを踏まえて、平成 26 年度の SUP について検討していく。

本稿の基本的な分析の枠組みは、前掲の平成 25 年度の SUP の分析と同様であるが、前稿では十分に検討することができなかった SUP への参加状況についての分析、および SUP 参加者のプログラムからの離脱についての予備的分析を新たに行う。具体的には、はじめに SUP への参加の有無に関わらず北九州市立大学における平成 26 年度の 1 年生の TOEIC スコアの状況を概観し、その後 SUP への参加状況と時間経過ともなうプログラムからの離脱状況、TOEIC スコアの水準および年間を通した TOEIC スコアの伸びと SUP との関係、TOEIC スコアの伸びを規定する要因について検討を進める。

* 北九州市立大学 グローバル人材育成推進室

このように、ここでの分析では SUP の主たる目的である TOEIC スコアの向上に対するプログラムの効果を中心に検討していくが、より大きな目的は、SUP がいかに 2 年生以降の本格的な KGP プログラムへの導入となっているのかを検討することにある。現段階ではデータが限られているためこの点については予備的な分析に留まるが、SUP の KGP カリキュラム全体における「スタートアップ」としての役割について、いくつか見えてきた点がある。結論を先取りするならば、現状の SUP は、受講者の TOEIC スコアを向上させるという点では一定の成果をあげているが、グローバル人材に向けた学習への動機づけなど、本格的な KGP プログラムへの導入としての役割についてはあまりうまくいっていない可能性があることが明らかになってきた。

SUP の主な目的は、2 年生以降の KGP プログラムで必要とされる英語力の基礎を養成することである。既に一定の英語力を有している者は SUP を受講せずにプログラムに参加することも可能ではあるが、実質的にはプログラムの参加者の大半は SUP の受講者である。この点を踏まえれば、本格的なカリキュラムの前段で英語力を養成する予備的講座としての役割と併せて、プログラムの内容的な導入としての役割についても改めて検討を行う必要がある。本稿ではこの点について、改善に向けた手がかりを探る予備的な考察までを射程とし、今後の調査とデータ収集の方向を示したうえでより踏み込んだ検討は次稿の課題としたい。

2. 学部・学科別 TOEIC スコア

本学では、KGP プログラムへの参加に関わらず、学期ごとに TOEIC テストの受験を義務付けており¹、1 年生、2 年生の英語教育科目の単位認定に利用されたり、成績に組み入れられるため、多くの学生が TOEIC テストを受験している。ここでは、SUP の効果の検討に先立って、平成 26 年度入学生の全学的な TOEIC スコアの状況について学部・学科別に概観する。

表 1 に、学部・学科別の 1 学期、2 学期の TOEIC スコア、および 1 学期から

¹ 基盤教育センターが開講する一部の必修英語科目において TOEIC テスト受験を義務付けており、スコアが成績に組み入れられる。ただし、地域創生学群については基盤教育センターの英語科目が必修となっていないため、TOEIC テストを受験しない学生が多い。

2 学期にかけての TOEIC スコアの変化量の平均と標準偏差をまとめた²。1 学期 TOEIC の学年全体の平均スコアは約 409 ポイント、標準偏差は約 130 となっている。TOEIC テストを実施している一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会の資料³によれば、470 ポイント以上が「C レベル」で「日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる」とされ、220 ポイント以上が「D レベル」で「通常会話で最低限のコミュニケーションができる」とされていることから、平均的に見れば北九州市立大学の 1 年生の 1 学期における TOEIC スコアは D レベルの上位付近にあると考えられる。1 年生 1 学期の TOEIC テスト受験は、SUP の TOEIC 受験料補助などとの関係もあり、大半の学生が 1 学期の終盤にさしかかった 7 月となる。したがって、このスコアは入学直後の値というよりも、大学での導入的な英語教育の効果がある程度反映されたものであるといえる。以降で SUP の効果や今後の学生の TOEIC スコアの状況を検討する際にはこの TOEIC スコアを初期値として参照することになるが、この点には留意しておく必要がある。

次に、学部・学科別に検討する。学部別にみると、文学部の値が全学の平均に近く、外国語学部はそれより約 150 ポイント高く、経済学部と法学部はほぼ同水準で平均より約 50 ポイント低くなっている。学部の特性を考えれば、外国語学部の TOEIC スコアが高く、文学部がその中間にあり、経済学部と法学部が同水準で相対的に低いスコアであることは、妥当な序列だといえる。検討するまでもなく明らかな差であると思われるが、学部間の平均スコアの差を分散分析で検討すると予想される通り有意な差が見られ ($F(3, 1006)=197.164, p<0.000$)、Dunnnett C 法による多重比較から経済学部と法学部の間には有意な差はなく、これらと外国語学部および文学部との間には有意な差があり、また文学部と外国語学部の間にも有意な差があることが確認できた⁴。

² 各学期で複数回の TOEIC テストを受験した学生については、各学期の最高点を集計した。また、年間の TOEIC スコアの変化については、各学生の 2 学期の TOEIC スコアから 1 学期のスコアを引いた差の平均と標準偏差を計算した。なお、地域創生学群については TOEIC テストの受験者数が非常に少ないため、平均と標準偏差の数値は示していない。以降の学部・学科別の分析でも、地域創生学群は除外する。

³ 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会「PROFICIENCY SCALE TOEIC スコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表」http://www.toEIC.or.jp/library/toEIC_data/toEIC/pdf/data/proficiency.pdf (2015 年 04 月 17 日確認)。

⁴ 以降の分析では、特に断りがなければ統計的検定において 5% 水準で帰無仮説が棄却される場合に、統計的に有意であると判断する。

【表 1】学部・学科別 TOEIC スコアの分布

	1 学期 TOEIC スコア			2 学期 TOEIC スコア			TOEIC スコアの 変化			
	学生数	平均	標準偏差	N	平均	標準偏差	N	平均	標準偏差	N
外国語学部	249	557.5	127.9	222	590.2	127.1	203	30.6	75.5	192
英米学科	115	610.9	125.9	102	643.0	124.6	99	28.7	72.9	91
中国学科	53	498.6	122.3	49	521.1	105.5	38	33.8	89.6	37
国際関係学科	81	521.4	103.0	71	551.0	109.0	66	31.3	71.4	64
経済学部	306	350.2	103.5	296	371.3	105.4	272	21.1	71.9	270
経済学科	155	357.2	104.6	148	376.8	109.4	137	20.3	70.7	136
経営情報学科	151	343.2	102.2	148	365.7	101.2	135	21.8	73.3	134
文学部	235	409.3	100.6	224	441.9	98.5	215	32.8	68.8	210
比較文化学科	149	419.8	100.2	142	451.6	91.4	140	33.0	70.2	136
人間関係学科	86	391.2	99.3	82	423.7	108.9	75	32.6	66.7	74
法学部	279	351.0	98.1	268	382.1	99.0	256	28.4	75.4	252
法律学科	195	351.6	101.0	191	381.8	102.1	179	27.8	75.8	178
政策科学科	84	349.2	91.3	77	382.7	91.9	77	29.6	74.9	74
地域創生学群	94	—	—	6	—	—	6	—	—	5
全 体		408.8	134.8	1016	436.7	136.1	952	27.5	72.9	929

続いて学科別に検討する。学科は学部の下位グループであるため、学部ごとに検討することも考えられるが、ここでは学部に関わらず全ての学科を同時に分析し、学科間の TOEIC スコアの水準や序列を検討する。学部別の分析からある程度予想されるとおり、学科別の分散分析でも有意な差が見られた ($F(8, 1001)=84.615$, $p<0.000$)。Tukey HSD 法による多重比較で学科間の差を検討した結果を表 2 に示す。この表は、学科間の TOEIC スコアの平均の差を検討し、有意な差がないグループをサブグループとして整理したものである。英米学科は他のいずれの学科よりも平均が有意に高く、単独でサブグループを形成している。続いて、外国語学部の中国学科と国際関係学科が英米学科に次いで高い第 2 のサブグループを形成し、文学部の比較文化学科、人間関係学科の 2 学科が第 3 のサブグループを、法学部の 2 学科と経済学科および人間関係学科が第 4 のサブグループを、経済学部と法学部の 4 学科が第 5 のサブグループを形成している。第 3 のサブグループ以降はサブグループ間に重なりがあり差が判然としないところもあるが、全体として各学科の平均的な TOEIC スコアの序列がわかる。

【表 2】 Tukey HSD 法による学科別 TOEIC スコア平均の多重比較の結果

学科	サブグループ 1	サブグループ 2	サブグループ 3	サブグループ 4	サブグループ 5
英米学科	610.9				
国際関係学科		521.4			
中国学科		498.6			
比較文化学科			419.8		
人間関係学科			391.2	391.2	
経済学科				357.2	357.2
法律学科				351.6	351.6
政策科学科				349.2	349.2
経営情報学科					343.2

次に、学部・学科ごとの 2 学期の TOEIC スコアについても 1 学期と同様に検討する。学部間で 2 学期の TOEIC スコアの平均に差があるか分散分析で検討すると有意な差が見られ ($F(3, 942)=194.573, p<0.000$)、Dunnnett C 法による多重比較から外国語学部の平均が最も高く、次に平均が高い文学部との間に有意な差があり、経済学部と法学部との間には有意な差はなく、これらの 2 学部と文学部との間には有意な差がある。続いて学科ごとの平均を分散分析で検討すると、学科間に有意な差が見られ ($F(8, 937)=83.792, p<0.000$)、Tukey HSD 法による多重比較では全体の水準は異なるものの、表 2 に示した 1 学期 TOEIC スコアとまったく同じサブグループに分かれ、その序列も同様であった。

以上から、1 学期と 2 学期で TOEIC スコア水準の学部・学科間の序列はほとんど変化していないことがわかる。この点を、両学期の TOEIC スコアの変化量からも検討しておく。各学生の 2 学期 TOEIC スコアから 1 学期 TOEIC スコアを引いた差について学部・学科ごとの平均を分散分析で検討すると、学部間でも学科間でも有意な差は見られない (学部間 : $F(3, 920)=1.195, p<0.311$; 学科間 : $F(8, 915)=0.470, p<0.878$)。全学的にみれば、学部・学科ごとの TOEIC スコア水準の序列はそのままに、分布の位置がほぼ平行にスライドしているといえる。単純な数値でいえば、1 年生における英語教育の効果については学部・学科間で大きな差はみられないようである。

では続いて、1 学期から 2 学期にかけて TOEIC スコアが向上したのかどうかを

検討する。学年全体としてみれば、1学期よりも2学期のTOEICスコアの方が概ね20ポイントから30ポイント程度高いようにみえる。そこで、学年全体および学部・学科ごとに、1学期と2学期のTOEICスコアの平均に差があるかをt検定で検討したところ、すべての場合において1学期よりも2学期のTOEICスコアの平均の方が有意に高い値であることが確認できた⁵。したがって、いずれの学部・学科においても、1学期から2学期にかけてTOEICスコアが向上しているといえる。先の分析結果と合わせてみると、TOEICスコアの数値については、どの学部・学科も平均的には同程度の向上がみられることがわかる。ただし、各学生のTOEICスコアの水準によってTOEICスコアの変化量の実質的な意味が異なる可能性があるため、この点については後に検討する。

- 学部・学科ごとのTOEICスコアの序列は学部・学科の特性から予想されたとおりである
- 1学期から2学期にかけて学年全体としてTOEICスコアは向上している
- TOEICスコアの向上した数値そのものに学部・学科間の差はみられない

3. SUP への参加状況

ここまで、平成26年度入学生のTOEICスコアは、学年全体の平均として見れば1学期よりも2学期のスコアの方が有意に高いことを示した。このことは、総じて見ればKGPも含めた北九州市立大学の英語教育プログラムが、1年生のTOEICスコアを向上させていると考えることができる。このことを踏まえて、次にSUPの効果について分析を進める。

KGPにおいて、1年生時に独自のプログラムとして用意されるのはSUPのみである⁶。しかしこのSUPは、単位認定をとまなう正課の科目ではなく、主に英語力の向上、とりわけTOEICスコアの向上に焦点をあてた課外の講座である。そのため、

⁵ 煩雑になるため統計量は省略する。ほぼ全ての分析において1%水準で有意であったが、中国学科のみ5%水準で有意であった。

⁶ 2年生以降のKGPのプログラム修了に必要な科目で1年生から履修できるものもあり推奨科目として指定しているが、これらはKGPが独自に用意した科目ではなく、基盤教育センターの科目を推奨科目として指定しているものである。

授業の形態や時間割などは他の正課の科目と同様であるが、「履修」や「修了」といった概念については異なっており、この点をまず整理しておく。

1年生がSUPを受講するためには、まず受講申請を行う。ここでは、この受講申請書を提出した者を「申請者」という。学生からの申請を受けて、事務局はレベル別にクラス分けを行い、できるだけ正課の科目と重ならないように受講可能な講座の時間割候補を申請者に通知する⁷。この段階で、申請書を提出したにも関わらず、時間割を受け取らない者がいる。そこで、申請者に対して事務局から時間割を受け取った者を「登録者」という。登録者は受け取った時間割のうち、各人の都合によって出席可能な講座を選択して出席する。しかし時間割を受け取ったものの、実際にはどの講座にも全く出席しない者が一定数生じる。そこで、少なくとも1度は講座に出席した者を「履修者」という。

SUPは基本的に通年のプログラムであるため、2学期については1学期の登録者が自動的に登録され、ごく少数であるが2学期から受講申請する者が登録者に加わる⁸。そのため、既に1学期中にSUPから離脱した者も名簿上の登録者に含まれており実態とは乖離したものとなっている。そして、両学期ともSUPを履修し、いずれも欠席回数が2回以内の者を「修了者」と定義している。

このように、受講申請から修了までの各段階を区別するのは、SUPが単位のある正課の科目ではないためプログラムへの申請や履修、離脱に対するハードルが低く、各段階での学生数の変動が比較的大きいためである。また「修了」については試験や課題を課しているわけではなく、出席回数のみで判断している。したがってSUPの「修了」は、あくまでもSUPを最後まで履修したことを示すにすぎない。以上のように区分したうえで、表3にSUPの各段階における参加状況を学部・学科別に整理した。

はじめに学年全体の状況についてみると、新入生1163名のうち374名が申請書を提出しており、そこから登録までに若干減少し、実際に講座に足を運ぶのは321名(学年全体に対して27.6%)となる。登録から講座に出席するまでの段階で約50

⁷ 学部横断的なプログラムであるため、あらかじめ正課の時間割などを踏まえてSUPのクラス編成を行うのが困難である。そこで学生にはいくつか候補となる曜日時限を提示し、学生は時間割等の都合に応じて初回の講座に出席することでクラスが確定する。

⁸ 後期から受講申請する者は少数であるため、「申請」という段階は特になくそのまま「登録」としている。平成26年度に後期から受講申請をしたのは9名である。

【表 3】学部・学科別の SUP の受講状況

	学生数	前期 SUP 申請者	前期 SUP 登録者	前期 SUP 履修者	後期 SUP 履修者	SUP 修了者
外国語学部	249	162	155	143	55	34
英米学科	115	93	90	80	25	14
中国学科	53	26	24	24	7	4
国際関係学科	81	43	41	39	23	16

経済学部	306	84	84	59	19	14
経済学科	155	34	34	28	10	8
経営情報学科	151	50	50	31	9	6

文学部	235	68	68	63	41	24
比較文化学科	149	44	44	40	27	11
人間関係学科	86	24	24	23	14	13

法学部	279	57	57	53	23	16
法律学科	195	33	33	29	12	10
政策科学科	84	24	24	24	11	6

地域創生学群	94	3	3	3	2	1

全体	1163	374	367	321	140	89

単位：人

名が離脱しているが、これらの学生は申請書を提出したにも関わらず、講座を受講しなかった者である。量的にはさほど多くはないが、少なくともプログラムに何らかの関心をもった学生であることは確かであり、彼らがどのような理由で申請し、また受講しなかったのかについては少し注意しておく必要があるかもしれない。

学部・学科別にみると、SUP を履修する者が最も多いのが外国語学部で 57.4% が履修しており、中でも英米学科は約 7 割が履修している。次いで履修者が多いのが文学部で 26.8% となり、経済学部と法学部の履修率がいずれも約 20% となっている。この履修者割合の序列は、概ね学部・学科別の TOEIC スコア水準の序列と一致しているように見える。ここから学部・学科の特徴として予想される英語力や英語学習への関心と、SUP および KGP への関心が相関していることがうかがえる。KGP プログラムに参加する学生の特徴の 1 つとして、「英語」がキーワードとなっていることは間違いないだろう。

2 学期の状況についてみると、まず目につくのは履修者数の減少である。SUP は通年の講座として企画されているが、実質的には 1 学期と 2 学期に分かれており、1 学期 SUP までで参加をやめる学生が多数存在する。この原因として夏期休暇の

影響も大きいと考えられる。2 学期 SUP の開始に先立って学生への周知を徹底したにも関わらず履修者数が大きく減少することから、主な要因は自らの意志で参加を取りやめた、ないしは 2 学期も引き続き参加するほどの動機づけがなかった、ということになるだろう。現状ではこの点を検討するための十分な材料は手元にないが、SUP の大きな課題の 1 つであるため、本稿では SUP からの離脱について予備的な検討を行い、詳細については今後の調査課題としたい。

通年での SUP を最後まで履修した修了者の数についてみると、全体で 89 名が修了しているが、2 学期 SUP の履修者を母数にとると 63.6%、1 学期 SUP の履修者を母数にとると 27.7%、学年全体では 7.7% となる。この数値をどのように評価するのは難しいところであるが、SUP の位置づけが 2 年生以降の KGP プログラムへの導入であることを踏まえれば、そこで設けた定員数が 1 つの基準となるだろう。2 年生以降のプログラムの受講および修了の要件として SUP の履修や修了は必須ではなく、SUP を履修していなくても 2 年生から KGP の各種プログラムには参加できる。しかし、プログラム参加者の大半が SUP の修了者であることから、これが最終的な KGP の修了者の実質的な母数であるといえる。すなわち、ここでどれだけの学生を捕捉できるのかによって、KGP の量的な成果が大きく左右される。

KGP には修了認定を行うプログラムとして、副専攻となる Global Education Program (以下、GEP) と主専攻の範囲内で修了できる Global Standard Program (以下、GSP) が用意されているが、前者の定員は 50 名、後者の定員は 130 名となっている。この数値を基準とすれば、SUP の修了者が約 90 名というのは、やや心許ない数値であるといえる。この 2 年生以降のプログラムの定員数をさしあたっての目標値とするならば、1 学期 SUP の申請者数が約 370 名であることから、そこから概ね半数程度を SUP の修了までもっていくことが目安になるだろう。だとすれば、現状では SUP の申請者に対して修了者の割合は 23.8% であるが、これを 50% 前後まで引き上げることができれば一応の目標を達成することができるだろう。

この目標を達成するためには、SUP への参加者そのものを増加させるか、参加した者の離脱を減少させることが考えられる。しかし前者については、平成 25 年度の申請者が平成 26 年度よりも 100 名以上多かったにも関わらず、修了者数は平成 26 年度と同水準であった (西出・永末, 2015) ことを踏まえれば、単純に入り口で母数を増やしても効果はあまり見込めそうにない。したがって、KGP に多少なりとも関心を持って SUP に申請した、少なくともプログラムへの参加に一步で

も踏み出した者をいかに離脱させずに修了まで導くのが、SUP の課題であるといえる。そのためには、SUP を途中で離脱する理由について検討し、それらを踏まえた SUP の改善が必要だろう。

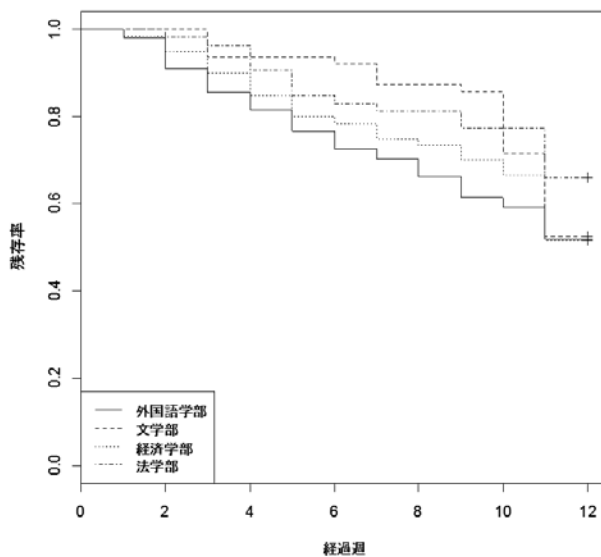
最後に、SUP 履修者のプログラムからの離脱状況について若干の予備的検討を加えておく。ここでは、患者の死亡や何らかのイベント発生までの時間について定量的に検討する「生存時間分析」ないしは「イベントヒストリー分析」などと呼ばれる手法を用いて、SUP からの離脱を検討する⁹。具体的には、SUP からの離脱がプログラムの開始からどのくらいの時間でどの程度生じ、それがどのような要因によって左右されるのかを検討する。ただし、本来検討すべきだと考えられる、学生が離脱する理由や講座への満足感、手応えなどの心理的変数は、調査が行われていないため利用できない。そのため、ここではデモグラフィックな変数のみを用い、時間経過とともに SUP からどのように離脱していくのかを簡単に検討するととどまる。

図1、図2には、1学期 SUP と2学期 SUP について、時間の経過とともにどのように学生が離脱していくのか、すなわちどれだけ離脱せずに「生存」しているのかを示す「生存関数」を Kaplan・マイヤー法によって推定し、その様子を図示した¹⁰。図1から、1学期 SUP ではある週に離脱者が集中するなどのパターンは見られず、時間の経過とともに徐々に残存者数が減少していく様子がみとれる。おそらく、何か特定のきっかけがあるわけではなく、講座に飽きたり動機を維持できなくなったりした者が徐々に離脱しているのだろう。学部別にみると、さほど大きな差があるようにはみえないが、文学部は離脱までの時間がやや長いようではある。

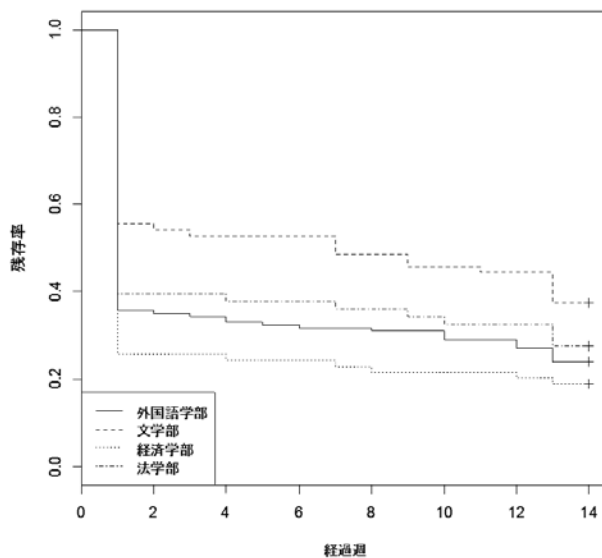
⁹ イベントヒストリー分析については、参考文献に挙げる山口の一連の連載や、コレット (2013)、三輪・林 (2014) などが参考になる。

¹⁰ Kaplan・マイヤー法による生存関数の推定については、コレットの「2.1.2 生存関数の Kaplan・マイヤー推定」(コレット 2013 訳書 19-22 頁) が詳しい。なお推定および図の作成については、統計解析向けのプログラミング言語である R 言語の survival パッケージを用いた。SUP からの離脱は、毎回の出席データから判断するが、必ずしもいつプログラムから離脱したのかが明確にならない場合もある。例えば、連続して欠席した後一度出席し、その後一度も出席しないとあった場合、連続した欠席の前まで履修していたと考えるのか、連続した欠席の後の出席までと考えるのかを判断が必要である。ここでは、連続して2回欠席した後一度だけ出席して、その後出席がない場合は、最後の出席回まで履修したと判断するが、連続した欠席が3回となった場合には、最後の出席回ではなく、連続した欠席の前回までの履修と判断した。

北九州市立大学におけるグローバル人材育成事業の現状と課題
 —平成 26 年度入学生のプログラム参加状況および TOEIC スコアの分析—



【図 1】1 学期 SUP の「生存関数」



【図 2】2 学期 SUP の「生存関数」

図2に示す2学期の状況は、1学期 SUP の履修者を母数としているため、2学期 SUP の初回で大幅に離脱者が生じているようにみえるが、2学期 SUP の母数が1学期 SUP で最後まで残った者であるとすれば、1週目の落差はその点を割り引いてみる必要がある。本来ならば通年で分析を行うべきであるが、ここではこれ以上踏み込まない。2学期 SUP の2週目以降に注目すると、時間の経過にともなう離脱の割合が1学期と比べて少ないようにみえる。つまり、2学期 SUP に一度でも足を運んだ者は、1学期 SUP と比べると最後まで履修を続ける確率が高い。2学期 SUP に参加する者は、夏期休暇を経ても SUP に参加する学習意欲を維持した者であり、そのような学生だけが選抜されているため離脱の割合も低いのだろう。これらのことを踏まえれば、1学期 SUP の段階でいかに動機づけを行い、1学期 SUP から夏期休暇を経でいかに2学期 SUP につなげていくのかが、SUP の修了者数を確保するための課題だといえよう。

次に、SUP から離脱するまでの時間がどのような要因に左右されているのかを、離散時間ロジットモデルで簡単に検討しておく。離散時間ロジットモデルとは、イベントヒストリー分析の1つの方法で、イベントが離散的な時間で発生する場合に適した分析方法である¹¹。分析結果を表4に示しているが、離散時間ロジットモデルはデータを「パーソン・ピリオドデータ」という形式に変換し¹²、イベント発生の有無を目的変数としたロジスティック回帰となるため、ロジスティック回帰の分析結果と同様に解釈すればよい。

ここでは経過時間の効果を、第3週を参照カテゴリとするダミー変数として検討している。第3週を基準としたのは、SUP への出席状況がほぼ安定したと考えられる時期であるためである。両学期とも有意な影響があると思われるのは、初回と最終回前である。1学期は入学直後であるため初回で離脱する者が少ないのだろう。2学期の初回は先に検討したとおりである。最終回前に離脱の確率が大きく上昇するのは、TOEIC テストの受験を終えたことや、TOEIC テスト受験料の助成を得るための出席回数を満たしたために欠席することなどが、その理由として考えられる。

¹¹ 離散時間ロジットモデルについては、山田(2001c)、山田(2001d)、山田(2002a)が詳しい。

¹² 通常の分析に用いるデータは「パーソンレベルデータ」と呼ばれ、1行に1サンプル分のデータが入力されているが、パーソンピリオドデータでは、1行が離散時間モデルの1つの時間単位を示しており、1人分のデータが複数行で表される。パーソンピリオドデータの詳細および変換方法については、「15.2 パーソンピリオドデータ」(三輪・林 2014 235-243 頁)、山田(2001d)を参考にした。

それ以外の週では、図 1、図 2 からもうかがえるように特定の時期に大幅に離脱者が増減するということはないようである。学部やレベルの影響をみると、1 学期は法学部の離脱が少なく、2 学期は文学部の離脱が少ないようである。また、2 学期の基礎クラスでは離脱する学生が多い傾向にある。

以上を整理すると、学部やクラスのレベルによって若干の差は見られるものの、時間経過に伴う離脱状況には特に際立ったパターンはなく一定の割合で徐々に参加者が減少しており、ここでの限定的な変数のみでの分析では学生が SUP を離脱する

【表 4】 SUP から離脱するまでの時間に関する離散時間ロジットモデルによる分析

	1 学期 SUP			2 学期 SUP		
	偏回帰係数 B	exp(B)	標準誤差	偏回帰係数 B	exp(B)	標準誤差
経過週 (Ref. 第 3 週)						
第 1 週	-1.024 *	0.359	0.564	5.170 ***	175.966	0.719
第 2 週	0.199	1.220	0.381	0.512	1.668	1.007
第 4 週	0.229	1.257	0.390	1.257	3.514	0.874
第 5 週	0.359	1.432	0.382	-0.115	0.891	1.230
第 6 週	0.028	1.028	0.424	-0.105	0.901	1.230
第 7 週	0.066	1.068	0.425	1.552 *	4.720	0.845
第 8 週	-0.158	0.854	0.461	0.641	1.899	1.007
第 9 週	0.437	1.548	0.391	1.079	2.942	0.921
第 10 週	0.658 *	1.932	0.376	1.394	4.031	0.875
第 11 週	1.863 ***	6.445	0.312	0.019	1.020	1.231
第 12 週				1.440 *	4.222	0.875
第 13 週				2.842 ***	17.142	0.767

学部 (Ref. 外国語学部)						
文学部	-0.300	0.741	0.265	-0.670 **	0.512	0.263
経済学部	-0.130	0.879	0.275	0.027	1.027	0.286
法学部	-0.637 **	0.529	0.311	-0.385	0.681	0.299

性別 (男性ダミー)						
	0.152	1.164	0.189	0.251	1.285	0.201

レベル (Ref. 初級)						
基礎	-0.276	0.759	0.285	0.467 **	1.595	0.236
中級	-0.223	0.800	0.280	-0.157	0.855	0.257
上級	-0.245	0.783	0.336	0.280	1.324	0.353

McFadden R ²	0.064			0.469		
N	3118			1933		

***:p<0.01, **:p<0.05, *:p<0.10

※ N はパーソンピリオドデータに変換した際の分析上のサンプルサイズである

要因を探る手がかりはあまり得られない。裏を返せば、何か大きな問題があり、それをきっかけに大量に離脱しているわけではないため、改善すべき課題がはっきり見えにくいともいえる。なんとなく講座が面白くなく、出席が面倒になり、単位もないので動機を維持できずに特に明確な理由もなく離脱するというのであれば、即効性があり有効性の高い対策を講じることは難しいかもしれない。これは、SUPだけの問題ではなく、KGP 全体として学生を引き付ける魅力的なプログラムとなるように地道に改善していく必要があるということを示唆しているのかもしれない。とはいえ、1 学期から 2 学期にかけての離脱者の多さは、夏期休暇が大きな原因であることはほぼ間違いない。さしあたっては、原因がある程度ははっきりしており現実的にもある程度対応可能な両学期の受講継続性の問題が、喫緊の課題である事は間違いないだろう。

- 学年全体の 3 割弱が SUP に受講申請を行っている
- 学部・学科別の TOEIC スコアの序列と SUP への参加率とは関連しているようにみえる
- 当初から比較的英語力の高い者が SUP に参加する傾向にあり、KGP が「英語」と強く関連付けて認識されている可能性がある
- 夏期休暇を経て 2 学期になると大幅に参加者数が減少するが、2 学期の履修者は 1 学期に比べれば離脱しにくい
- 1 年生の 1 学期の段階でいかにグローバル人材育成に向けた動機づけを行うかが課題である
- 2 年生以降の本格的な KGP プログラムの定員を考えれば SUP の修了者を現状の 2 倍程度まで増やす必要がある
- 現状では夏期休暇以外で SUP からの大きな離脱要因がみあたらず徐々に履修者が減少する
- KGP のコンセプトや魅力が十分に伝わっておらず、SUP で英語学習を行う動機が維持できないために時間経過とともに履修者が減少している可能性がある

4. SUP への参加状況と TOEIC スコアの関係

これまでに、平成 26 年度の 1 年生の TOEIC スコアの状況と SUP への参加状況について整理してきた。これらを踏まえて、SUP が TOEIC スコアにどのような影響を及ぼしているのかを検討する。表 5 に、SUP への参加状況別に TOEIC スコアを整理した。

【表 5】 SUP 受講状況別の TOEIC スコア平均

	1 学期 TOEIC スコア			2 学期 TOEIC スコア			TOEIC スコアの 変化		
	平均	標準偏差	N	平均	標準偏差	N	平均	標準偏差	N
履修なし	370.0	114.5	700	393.7	114.6	643	24.8	72.8	630
履修あり	494.9	136.6	316	526.1	134.2	309	33.2	73.0	299
1 学期 SUP 履修	498.4	136.4	307	528.6	134.9	301	32.1	72.8	291
1 学期欠席 2 回まで	493.7	128.8	199	534.0	131.0	194	41.9	71.1	191
1 学期欠席 3 回以上	507.0	149.8	108	518.6	141.7	107	13.2	72.5	100
2 学期 SUP 履修	504.3	129.2	138	548.1	124.4	130	49.8	75.2	129
2 学期欠席 2 回まで	486.5	118.3	97	541.3	119.5	95	58.3	74.8	94
2 学期欠席 3 回以上	546.5	145.0	41	566.6	137.1	35	27.0	72.3	35
修了	493.0	116.3	88	548.1	121.3	86	58.8	74.6	85

はじめに、1 学期の TOEIC スコアと SUP との関係についてみる。1 学期の TOEIC テストの受験時期は 1 学期の終盤であるが、この TOEIC スコアを初期値とする¹³。この 1 学期 TOEIC スコアと SUP の関係をみることで、どのような学生がプログラムに参加し、また最後まで履修しつづけるのかを検討する。

SUP は任意受講のプログラムであるため、ここでは先に示した実質的な参加者である「履修者」とそれ以外の学生とを比較する。表 5 に示す通り、両学期いずれも SUP を履修していない学生の 1 学期 TOEIC スコアの平均が 370.0 ポイントであるのに対して、両学期のいずれかのプログラムを履修した者の平均は 494.9 ポイントとなり、両者の平均を t 検定で検討したところ有意な差が確認できた ($t=14.163$, $df=522.957$, $p<0.000$)。ここから、SUP に参加する学生は当初から本学学生の中で

¹³ TOEIC テストではテストと同時に簡単なアンケートが行われており、その中に過去の TOEIC テストの受験経験をたずねる項目が設けられている。1 学期 TOEIC では、大半の学生が初めての TOEIC テスト受験であると回答している。

英語力がある程度高い者であることがうかがえる。KGP プログラムは、必ずしも英語力を向上させることだけに主眼に置いたものではないが、やはり英語学習に関心が高く、これまでも英語学習に積極的に取り組んできたと考えられる学生が SUP に参加する傾向があるようである。

では次に、1 学期 SUP を履修した者について、出席回数と 1 学期 TOEIC スコアとの関係を検討する。まず、出席回数と 1 学期 TOEIC スコアとの関係をみると、両者の間には有意な相関は見られない (Pearson's $R=0.020$, $p<0.723$)。また、SUP の修了の要件である 1 学期 SUP の欠席回数が 2 回以内の学生の 1 学期 TOEIC スコアの平均は 493.7 ポイントであるのに対して、欠席が 3 回以上の学生の平均は 507.0 ポイントとなり、単純な数値だけを見れば、むしろきちんと出席している学生の平均スコアの方が低い。ただし、両者の 1 学期 TOEIC スコアの平均には統計的に有意な差はなく ($t=0.816$, $df=305$, $p<0.415$)、誤差の範囲である。これを踏まえて次に、2 学期 SUP への出席状況別に 1 学期 TOEIC スコアを比較すると、SUP に参加する者の特徴の一端が見えてくる。

夏期休暇を経て 2 学期の SUP に参加する者は大幅に減少するが、2 学期 SUP の履修者は 1 学期 SUP に比べれば途中で離脱することなく最後まで継続して受講する傾向にある。2 学期 SUP 履修者のうち 1 学期 TOEIC スコアのデータが存在する者が 138 名いるが、そのうち 97 名が欠席回数 2 回以内の者で、3 回以上欠席したのが 41 名である。この 2 つのグループで 1 学期 TOEIC スコアの平均を比較すると、前者は 486.5 ポイントであるのに対して後者は 546.5 ポイントとなり、 t 検定で検討すると両者には統計的に有意な差が確認できる ($t=2.540$, $df=136$, $p<0.012$)。つまり、2 学期 SUP を途中で離脱しているのは、入学当初に比較的英語力が高かった層であることがうかがえる。

現時点ではこの点を検証する資料が無いため、1 学期の段階で TOEIC スコアが高い者が離脱する傾向にある理由については推測するしかないが、例えば入学当初からある程度英語力が高い学生にとって SUP の内容があまり満足できるものではなかったことや、TOEIC スコアが高いため相対的にスコアが伸びにくく SUP の効果が感じられにくいこと、既に必要な TOEIC スコアを達成していることなどが理由として考えられる。いずれにしても、英語が苦手と授業内容についていけないといった理由ではなく、潜在的には 2 年生以降の KGP プログラムに参加する見込みが高い層が離脱する傾向には注意が必要であり、詳細な検討が必要だろう。

1 学期 TOEIC スコアと SUP の関係から見てきたことを整理すると、SUP に参加しているのは入学当初から本学学生の中である程度 TOEIC スコアが高い層であること、1 学期 SUP では途中で離脱する者と最後まで受講する者との間に 1 学期の平均的な TOEIC スコアには差はないが、2 学期 SUP を離脱するのはむしろ 1 学期の段階で TOEIC スコアが高い学生であることなどが明らかになった。KGP プログラムは英語力だけに注力するものではないが、プログラムの主要な修了要件、カリキュラム構成や広報内容などから「英語」がキーワードとなっていることは間違いない。そのため、英語学習に比較的強い関心がある層が参加しやすいのは当然である。しかしこれは、視点を変えれば英語に苦手意識があったり英語に関心がない学生は、そもそもこのプログラムには参加しないということでもある。この点は、大学としての「グローバル人材育成」のあり方の問題として今後議論する必要がある課題だろう。

ところで、当初から TOEIC スコアが高い者が SUP を途中離脱する傾向にある事は大きな課題であるといえるかもしれない。そのような者が、後の KGP プログラムに必要な TOEIC スコアを達成していることなどを理由として SUP を離脱し、2 年生以降の KGP プログラムには参加するというのであれば、TOEIC スコア向上に重点を置く SUP の位置づけを考えればあまり問題はない。しかし、彼らがそのまま KGP プログラムそのものから離脱しているようであれば、大きな問題である。この点は、今後注意深く追跡調査を行う必要がある。

では次に、2 学期の TOEIC スコアと SUP との関係について検討する。2 学期 TOEIC スコアについては、SUP の効果との関係でいえば、スコアの水準そのものではなく TOEIC スコアがどれだけ向上したのか、という点が主な関心である。そのため、ここでは 2 学期 TOEIC スコアの水準そのものではなく、1 学期からの変化について検討する。

まず、両学期でいずれかの SUP を履修した者と、まったく SUP に参加していない者との間で TOEIC スコアの両学期の変化量（以降、この変化量を TOEIC スコアの「伸び」と表現する）の平均を t 検定によって検討すると、両者に有意な差は見られない ($t=1.637$, $df=927$, $p<0.102$)。ただし、ここでは履修者を通年で 1 度でも SUP の講座に出席した者としており、1 学期に 1 度だけ出席した者も含めた集計であるため、差がみられなかった可能性がある。途中でプログラムを離脱した者についての検討は別に必要であるが、SUP の効果を検討するためには一通りプログラ

ムを受講した者との比較が必要である。

1 学期 SUP 履修者の TOEIC スコアの平均的な伸びは、表 5 に示す通り 32.1 ポイントであるが、そのうち欠席回数が 2 回以内の者では TOEIC スコアの平均的な伸びが 41.9 ポイントで、3 回以上欠席した者では 13.2 ポイントと大きな差がみられる。この差を t 検定で検討すると有意な差が確認でき ($t=-3.252$, $df=289$, $p<0.001$)、1 学期 SUP を最後まで受講した者は途中で離脱した者よりも明らかに TOEIC スコアが向上しているといえる。ここで先の 1 学期 SUP の分析結果、すなわち両者には 1 学期 TOEIC のスコアに差が見られなかった点を思い起こせば、入学当初にはほぼ同水準であった TOEIC スコアが、1 学期 SUP を最後まで受講することで、明らかにその後の TOEIC スコアの伸びに差が生じていることがわかる。

続いて、2 学期 SUP についても同様に検討を進める。2 学期 SUP を履修した者の TOEIC スコアの平均的な伸びは 49.8 ポイントであり、このうち欠席回数が 2 回以内の者では 58.3 ポイント、欠席回数が 3 回以上の者では 27.0 ポイントとなる。先ほどと同様に、欠席回数のグループで分けて両者の TOEIC スコアの伸びの平均を t 検定で比較すると、両者には有意な差が確認できる ($t=-2.132$, $df=127$, $p<0.035$)。やはり 2 学期 SUP でも、最後まで受講した者は TOEIC スコアが明らかに伸びているようである。加えて、先に示したように 2 学期 SUP の途中離脱者は、最後まで履修した者よりも 1 学期 TOEIC スコアの水準が高いことは注目すべき点である。何度も繰り返すように検証の材料が手元にないため推測となるが、当初の TOEIC スコアの水準が高い者が最後まで SUP を受講し続けない傾向にあり、また彼らの TOEIC スコアの伸びも小さいことを合わせて考えれば、SUP に「手応え」が感じられずに離脱していることが、要因の 1 つとして挙げられるかもしれない。

最後に、両学期ともに SUP の欠席回数が 2 回以下の修了者では TOEIC スコアの伸びの平均が 58.8 ポイントとなっている。2 学期 SUP の履修者の大半は 1 学期 SUP を最後まで受講した者であるため、2 学期 SUP の欠席回数が 2 回以内の者の TOEIC スコアの伸びとほぼ一致する。以上のように、ここでは SUP と TOEIC スコアの伸びとの関係について検討してきたが、1 年間の SUP の受講者数変動の構造が、ほぼ 1 学期 SUP の申請者数を初期値として新たに受講者が加わることなく 2 学期 SUP の修了までに学生が離脱していく形である事を考えれば、ここでの分析は SUP 受講の継続状況と TOEIC スコアとの関係を検討してきたと言い換えることができるかもしれない。その点から整理しなおせば、1 学期 SUP の途中で離脱

するよりも最後まで受講する方がTOEICスコアは伸びており、2学期SUPを履修する方が1学期で履修を取りやめるよりも向上し、そして2学期SUPの最後まで受講した者が最もTOEICスコアが伸びている。したがって、SUPをしっかりと受講すれば着実にTOEICスコアが向上するといえる。

ただし、1年間のSUPにおけるTOEICスコアの伸びの水準としてこれらを高いと見るか低いと見るかは、TOEICスコアそのものの水準と共にKGPの目標値との兼ね合いで考える必要がある。KGPの2年生以降のプログラムでは、副専攻として履修するGEPのGlobal Business Courseで1年生終了時に600ポイント以上、Global Studies Courseで550ポイント以上、主専攻の範囲内で履修するGSPで470ポイント以上のTOEICスコアを有していることを申請要件としている。SUP修了者の2学期のTOEICスコアの平均値は約550ポイントであるが、これはGlobal Studies Courseの申請要件とほぼ同じ水準である。SUP修了者の2学期TOEICスコアの標準偏差が約120であることを考えれば、SUPの修了者が到達した平均的なTOEICスコアの水準は2年生以降の3つのプログラムの要件として設定しているTOEICスコアの範囲を概ねカバーしており、一応の目標は達成しているといえる。

- SUPを履修するのはそもそも当初から英語力が高い者であり、英語力や英語への苦手意識など「英語」そのものへの態度がKGPプログラムへの関心や参加を大きく左右している可能性がある
- 様々な理由が考えられるが、2学期SUPを最後まで履修しない者の方が1学期の段階でのTOEICスコアが高い傾向にある点には注意が必要である
- SUPを履修することが着実にTOEICスコアの向上に結びついている
- SUPの修了者のTOEICスコア水準は、概ね2年生以降のプログラムに必要なとされる水準に達していると考えられる

5. TOEICスコアの伸びを規定する要因

ここまでの分析では、SUPのTOEICスコアに対する効果について、SUPへの参加状況で分けてTOEICスコアやその伸びの平均を比較してきた。全体としてみれば、SUPへの参加の水準が高い（最後まで履修し続ける）者ほど、TOEICスコアが伸びていることが明らかになった。他方で、表5におけるSUP修了者のTOEIC

スコアの平均的な伸びは58.8ポイントであるが、この値に対して標準偏差は74.6とばらつきが大きい。つまり、修了者でも大きく TOEIC スコアを伸ばした者とそうではない者との差が大きいことがうかがえる。そこで次に、TOEIC スコアの伸びを左右する要因について少し踏み込んで検討する。

TOEIC スコアの伸びを左右する要因は様々であるが、ここでは SUP への参加状況に加えて、SUP のクラスのレベル、当初の TOEIC スコアの水準の影響について分析する¹⁴。具体的には、SUP 履修者のデータを用い、TOEIC スコアの伸びを目的変数に、先に挙げた変数を説明変数としたモデルで重回帰分析を行う。

説明変数としてモデルに投入する SUP への参加状況については、通年での SUP への出席回数を用いる。これまでの分析結果から、出席回数が多いほど TOEIC スコアが伸びていることが予想される。次にレベルであるが、SUP は学生の英語の習熟度別にクラスが編成され¹⁵、それぞれのレベルに応じて異なる内容の講座が行われている。したがって SUP のレベルは、授業内容の差と学生の当初の英語の習熟度の違いを含んだ変数であるといえる。しかし、ここでは当初の学生の英語の習熟度として1学期 TOEIC スコアをモデルに投入するため、習熟度については一応統制されていると考えられることから、主にレベル別の授業内容や学生の質の違いなどが TOEIC スコアに及ぼす影響を検討できる。

先にも述べたように、TOEIC スコアの伸びを検討する際には、初期の TOEIC スコアの水準を考慮する必要がある。磯田・田頭 (2010) は、「もともとの習熟度が低い方が、高い者に比べ (TOEIC の) スコアが伸びる速度は速いという認識を、多くの教員が持っている¹⁶」(p.51) ことを踏まえて、多変量解析から英語の習熟度が高いほど TOEIC スコアの伸び幅が小さいことを指摘している。当初の TOEIC

¹⁴ これに加えて、所属学科と性別を統制変数としてモデルに投入する。北九州市立大学には外国語学部があり、学科によっては他学部と英語教育科目数が違うため、TOEIC スコアの伸びが左右される可能性がある。

¹⁵ SUP のレベル分けは、外国語学部と地域創生学群以外の学部については、入学時に基盤教育センターが実施している「プレイスメントテスト」のスコアを用いて行っている。外国語学部と地域創生学群ではこのプレイスメントテストを受験していないため、SUP への参加申請があった者には、北九州市立大学が導入している株式会社アルクが提供する eラーニング教材「NetAcademy2」のテスト演習を受験させ、そのスコアを用いてレベル分けを行っている。詳細については、平成 25 年度の SUP について分析した西出・永末 (2015) を参照されたい。

¹⁶ 括弧内は筆者による補足。

スコアの水準によってその後のスコアの伸びが異なり、スコアが高いほど伸び幅が小さいという点は、土肥ら（土肥，2006；土肥・柳瀬，2009）によっても指摘がなされている。また、TOEIC スコアの伸びと学習時間との関係として、同じ 100 ポイントのスコア向上でも、当初のスコアが 200 ポイントの者が 300 ポイントになるよりも、800 ポイントの者が 900 ポイントになる方が、より多くの学習時間を必要とするといわれている¹⁷。これらのことから、初期の TOEIC スコアが高い者ほどスコアの伸びは小さくなることが予想される。

以上を踏まえて、重回帰分析を行った結果を表 6 に示す。まず、このモデル全体では TOEIC スコアの伸びを有意に説明しており、自由度調整済決定係数の値から分散の 17% 程度を説明していることがうかがえる。モデルの説明力の絶対値としては必ずしも大きな値であるとはいえないが、TOEIC スコアの伸びには他にも様々な要因が影響することを考えれば、ある程度有効なモデルだと考えられる。次に、各説明変数の影響を見ると、SUP への出席回数、1 学期 TOEIC スコア、およびレベルのいずれもが TOEIC スコアの伸びに有意な影響を及ぼしている。

SUP への出席回数は、これまでの分析から予想されたとおり、TOEIC スコアの伸びに対して正の影響があるようである。この点は、平成 25 年度の SUP について分析した西出・永末（2015）でも指摘したとおりである。したがって、SUP の受講を続けた者は TOEIC スコアが着実に向上しているといえる。SUP の受講によって確かに TOEIC スコアが伸びているとすれば、問題は講座内容そのものよりも、学生のモチベーションや関心を喚起し、いかに受講を継続させられるかという点にあると考えられる。この点については、平成 27 年度の SUP において調査を実施し、検討する予定である。

1 学期の TOEIC スコアは、TOEIC スコアの伸びに対して負の影響を及ぼしている。つまり、当初の TOEIC スコアの水準が高いほどスコアの伸びは小さくなる。この点は先行研究の指摘とも一致しており、平成 25 年度の SUP の分析結果（西出・永末、

¹⁷ 管見の限りでは、この TOEIC スコアの初期の水準によるスコアの伸びと学習時間との関係について定量的に検討された文献は見当たらないものの、語学研修企業などが TOEIC スコアの水準ごとに必要な学習時間の目安を公開しており、スコアが高くなるほど同じ学習時間でもスコアの伸び幅が小さくなることが指摘されている。例えば <http://www.prolingua.co.jp/japanese/jjtoeic.html>（プロリンガ）、<http://souspeak.com/price/time/>（South Speak English Institute Inc.）など、語学研修企業の Web ページにこのような資料を見ることができる（いずれも 2015 年 5 月 10 日確認）。

2015)でも同様の結果がみられた。TOEIC スコアの水準によってスコアの伸びの数値の実質的な意味が異なるならば、SUP を TOEIC スコアの向上によって評価する際には、やはり各学生の TOEIC スコアの水準を踏まえて議論しなければならないといえるだろう。

レベル別にみると、初級クラスと比較して、中級クラスは TOEIC スコアの伸びに差は見られないが、基礎クラスでは TOEIC スコアの伸びが小さく、上級クラスではスコアの伸びが大きいようである。SUP は英語の習熟度によってクラス分けされており、よりレベルの高いクラスには相対的に初期の TOEIC スコアが高い者が多い。先に示したように、英語の習熟度が高いほど TOEIC スコアの伸び幅が少なくなることを踏まえれば、単純にレベル別の TOEIC スコアの伸びの平均をとれば、相対的に初期の習熟度が高い上級クラスの方が伸び幅は小さい可能性が高い。しかし、レベルのみで分けて TOEIC スコアの平均的な伸びを分散分析で検討すると、4つのレベルの間に有意な差は見られない ($F(3, 288)=0.901, p<0.441$)。つまり、

【表 6】 TOEIC スコアの伸びを目的変数とした重回帰分析

	ベータ	標準誤差
SUP 出席回数	0.243 ***	0.056
1 学期 TOEIC スコア	- 0.573 ***	0.081
1 学期 SUP レベル (Ref. 初級)		
基礎	- 0.568 ***	0.180
中級	- 0.003	0.189
上級	0.518 *	0.264
性別 (男性ダミー)		
	- 0.024	0.123
学科 (Ref. 比較文化学科)		
英米学科	0.295	0.225
中国学科	0.245	0.265
国際関係学科	0.235	0.232
経済学科	- 0.213	0.233
経営情報学科	- 0.195	0.234
人間関係学科	0.155	0.243
法律学科	- 0.046	0.227
政策科学科	- 0.362	0.247
R ²	0.213 ***	
Adj. R ²	0.173	
N	292	

***: $p<0.01$, **: $p<0.05$, *: $p<0.10$

よりレベルの高いクラスでは初期の英語習熟度の高さによって TOEIC スコアの伸びが目減りしてみえるにも関わらず、よりレベルの低いクラスと単純な数値としてみればほぼ同水準の TOEIC スコアの伸び幅があるということは、よりレベルの高いクラスの方が実質的には伸びが大きいといえる。平均だけをみればクラスのレベルは TOEIC スコアの伸び幅に影響していないようであるが、当初の TOEIC スコアの水準を統制することで、実質的にはレベルによる違いがあることが明らかになった。初期の英語習熟度が高い学生は、TOEIC スコアの伸び幅という面ではマイナスであるが、英語学習への姿勢や取り組みの点ではやはり優れており、上位クラスのより高度な授業内容とあいまって、単純な数値としては観察しにくい、実質的にはより高い効果があるということだろうか。

以上の分析を整理すると、SUP にきちんと出席すれば TOEIC スコアの向上につながることで、TOEIC スコアの伸び幅は当初の TOEIC スコアの水準が高いほど小さいが、実質的な効果はそれぞれの TOEIC スコアの水準を統制して検討する必要があること、1 年生では TOEIC スコアの伸びに対して学部・学科の違いはあまり影響していないことなどが明らかになった。ここでは、TOEIC スコアの伸びという点に注目しているが、TOEIC スコアの水準が上がるほど伸び幅が小さくなる傾向があることを考えれば、SUP の成果を単純に TOEIC スコアの伸びの数値だけで判断することには問題があることがわかった。SUP の成果は、当初の TOEIC スコアの水準に対してどのくらいの人数がどの程度の TOEIC スコアの水準に達したのかを、目標設定との関係で判断する必要があるということである。

- SUP への出席回数が多いほど TOEIC スコアの伸びも大きい
- 学生の当初の TOEIC スコア水準によって伸びが左右され、TOEIC スコアが高い者ほど数値上の伸び幅が少なくなる
- したがって TOEIC スコアの伸びについては、当初の TOEIC スコア水準を踏まえて評価しなければならない
- SUP のクラスのレベルによって TOEIC スコアの伸びに違いがあり、レベルが高いクラスの方が実質的な TOEIC スコアの伸びが大きい

6. まとめ

本稿では、北九州市立大学のグローバル人材育成プログラムである KGP の 1 年生向けプログラムとして設置されている SUP の平成 26 年度における成果と課題について、TOEIC スコアやプログラムへの参加状況を中心に検討してきた。

まず SUP と TOEIC スコアとの関係に注目すれば、SUP を最後まで受講した者の TOEIC スコアは着実に向上しており、その後のプログラムに必要な TOEIC スコア水準まで到達させることには、ある程度成功しているといえる。したがって、TOEIC スコアの向上という面でいえば、SUP は一定の成果をあげており、講座の内容そのものに大きな問題はないと考えられる。問題は、時間の経過とともに SUP の受講者数が減少し、最後まで受講し続ける者が少ない点である。これは、最終的な KGP の修了者数を左右する量的な問題でもあるが、より本質的には KGP の導入としての SUP の役割や位置づけをどのように考えるのか、という問題でもある。

これを踏まえて SUP の参加者の特徴についてみると、そもそも当初からの英語力が比較的高い者がプログラムに参加している傾向があるようである。しかしこれは、他方で英語に苦手意識のある者がプログラムには参加しにくいことを示唆している。グローバル人材育成が英語と密接な関係があり、SUP が英語力向上に主眼を置いているとしても、英語はあくまでもプログラムの一要素である。学生に認識されている KGP のコンセプトが「英語」ばかりに偏り、本質的なグローバル人材育成プログラムの内容や方向性が伝わっていないとすれば、対象とする学生の層や人材育成像などを含めて、KGP のプログラム内容や枠組みの検証と改革が今後必要となるだろう。

学生の SUP への参加状況についてみると、入り口の段階で参加申請する者の数は一定の規模を確保しているが、1 年間のプログラムを最後まで受講する者は、当初の申請者に比して大幅に少なく、残存者数は 4 分の 1 以下に落ち込む。SUP の受講者数は、1 学期 SUP では時間経過とともに徐々に減少し、夏期休暇を経て 2 学期 SUP の開始時点で大幅に減少するが、2 学期 SUP に参加した者は最後まで受講を続ける確率が高い。プログラムからの離脱理由については本稿で十分に検討できなかったが、夏期休暇以外で学生が離脱する特徴的な契機やパターンが見られないことや、SUP 講座の担当者から聞かれた声などを合わせて推測すれば、英語力

向上のパログラム内容そのものに何か重大な問題があるというわけではなさそうである。どちらかといえば、特段の理由があるわけではなく、SUP での英語学習の目的が見えにくいことがプログラムからの離脱につながっている可能性があるようである。すなわち、SUP の内容が KGP プログラム全体に対する動機づけに失敗していることが離脱の原因の 1 つであるといえる。

確かに、現状の SUP は TOEIC スコア向上に主眼を置いた講座が中心になっており、グローバル人材に向けた学習への動機づけの面では、取り組みがやや不十分であるように感じられる。もちろん、SUP においても 2 年生以降の本格的なプログラムについての周知やプログラムへの参加誘導などを行っているが、KGP の本質的なコンセプトを伝え、将来の進路や目標、人材育成像との関係で学習の動機づけを行うことについては、やはり手薄である。TOEIC スコアの向上という現状の SUP の設置趣旨からすればその役割は十分に果たしているといえるが、KGP の導入的な位置づけであることを考えれば、その後の本格的なプログラムへの参加や学習の動機づけの「スタートアップ」としての役割は十分に果たせていないといえる。そしてそれが、結局は SUP において英語を学習していくための動機を維持できない原因となり、SUP から学生が離脱していくことにつながっていると考えられる。これが、現状の SUP における大きな課題である。

ここで指摘したグローバル人材への動機づけの問題は、KGP のコンセプトと枠組み、および SUP の位置づけそのものに関わる重要な課題であるが、即効性のある処方箋を見つけることは容易ではない。しかしながら、一方でまったく関心のない者の興味を喚起する、といったゼロから出発しなければならない類の課題というわけではない。ここでの問題は、少なくとも KGP に関心を持った SUP への当初の参加者が、時間の経過とともに離脱していくことである。量的な拡大については別途議論するとして、現状でも初期の参加者数は一定の水準で確保できているといえる。したがって課題は、途中で離脱するこれらの学生をいかにグローバル人材に向けた学びへと動機づけ、2 年生以降の本格的な KGP のプログラムに誘導していくのか、という点にある。他方で、「英語」が前面に出すぎていることによって KGP の本質的なコンセプトが伝えられず、入り口の段階で敬遠されプログラムに取り込めていない学生がいることも確かであり、こちらにも目を配る必要がある。そのためには、SUP だけではなくプログラム全体を通して「英語」の位置づけを再検討するとともに、本質的な KGP のコンセプトをどのように設定し、それをどのよう

に学生に伝えていくのが鍵となるだろう。これらを念頭に、プログラムの改善に資するべく、今後も引き続き SUP および KGP の課題について調査・分析を進めていきたい。

参考文献

- 磯田貴道・田頭憲二「授業外での英語学習の効果 —TOEIC スコアの変化から—」『広島外国語教育研究』(14号)、広島大学外国語教育研究センター、47-59頁。
- コレット、デービット [宮岡悦良監訳・グラクソ・スミスクライン株式会社バイオメディカルデータサイエンス部訳] (2013)『医薬統計のための生存時間データ解析 原著第2版』共立出版 (=Collett, David (2003) *Modelling Survival Data in Medical Research (2nd edition)*, CRC Press)
- 土肥充・柳瀬弘美 (2009)「千葉大学における TOEIC IP スコアの包括的分析」『言語文化論叢』(No.3)、千葉大学言語教育センター、31-45頁。
- 土肥充 (2006)「TOEIC IP による千葉大生の英語力の現状分析」『人文と教育』(2)、千葉大学国際教育開発センター、15-29頁。
- 西出崇・永末康介 (2015)「Kitakyushu Global Pioneers における Start Up Program の成果と課題 —平成 25 年度入学生のデータから—」『基盤教育センター紀要』(第 21 号)、北九州市立大学基盤教育センター、37-53頁。
- 三輪哲・林雄亮 (2014)『SPSS による応用多変量解析』オーム社。
- 山田一男 (2001a)「イベントヒストリー分析 (1)」『統計』(9月号)、日本統計協会、74-79頁。
- (2001b)「イベントヒストリー分析 (2)」『統計』(10月号)、日本統計協会、70-75頁。
- (2001c)「イベントヒストリー分析 (3)」『統計』(11月号)、日本統計協会、73-78頁。
- (2001d)「イベントヒストリー分析 (4)」『統計』(12月号)、日本統計協会、73-78頁。
- (2002a)「イベントヒストリー分析 (5)」『統計』(1月号)、日本統計協会、68-73頁。
- (2002b)「イベントヒストリー分析 (6)」『統計』(2月号)、日本統計協会、65-70頁。
- (2002c)「イベントヒストリー分析 (7)」『統計』(3月号)、日本統計協会、69-74頁。
- (2002d)「イベントヒストリー分析 (8)」『統計』(4月号)、日本統計協会、73-78頁。

北九州市立大学におけるグローバル人材育成事業の現状と課題
—平成 26 年度入学生のプログラム参加状況および TOEIC スコアの分析—

- 頁。
- (2002e) 「イベントヒストリー分析 (9)」『統計』(5月号)、日本統計協会、55-60
頁。
- (2002f) 「イベントヒストリー分析 (10)」『統計』(6月号)、日本統計協会、69-74
頁。
- (2002g) 「イベントヒストリー分析 (11)」『統計』(7月号)、日本統計協会、58-63
頁。
- (2002h) 「イベントヒストリー分析 (12)」『統計』(8月号)、日本統計協会、63-67
頁。
- (2002i) 「イベントヒストリー分析 (13)」『統計』(9月号)、日本統計協会、60-65
頁。
- (2002j) 「イベントヒストリー分析 (14)」『統計』(10月号)、日本統計協会、66-71
頁。
- (2002k) 「イベントヒストリー分析 (最終回)」『統計』(11月号)、日本統計協会、
55-60 頁。

